

せつなな系植物楽しよくぶつがく
植物。ぼろ。ぼろ。



絵・文 群馬直美

オニ葉にんじん

野菜の葉っぱもいいものです。

特にスキなのがニンジンの葉。以前訪れた自給自足村のお宅のお勝手に、レース状の葉がどっさり。繊細な美しさで輝いていた。

「これは何の葉？」

「ニンジンよ」

おお！ と息を呑み、そのときからファンになった。ピーター・ラビットが遊んでいそうな、可憐な可憐な葉っぱなのだ。

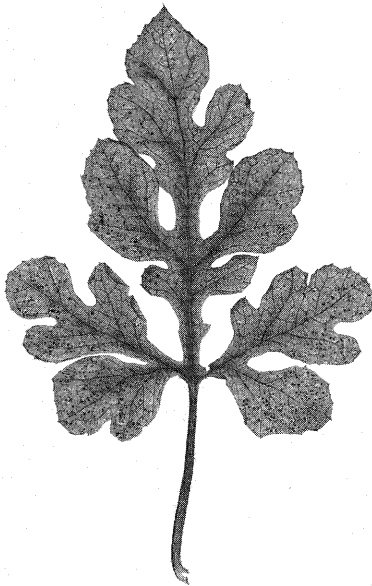
スーパーや八百屋さんの店先に並ぶ野菜くんたちは、みんな葉っぱを落とされて……この子

にはどんな葉っぱがついていたんだろう？ ビニールやスチロールのバックに詰められた野菜くんたちは、お行儀よく、どの子もつぶらな瞳でこちらを見つめている。多少の大きさの違いはあっても、みんな生真面目に立派。……あれえ？ と思う。

「あれえ？ こんなだったっけえ?!」

ぐわーんと、幼き日の八百屋さんの店先にタイム・スリップ。

黒々とした土間に古びた木の台。その上に萎びたような野菜くんたち。ときには、もうダメですと腐っているものさえも。どの子も、大きさも形もテンデンバラバラ。薄暗い店内には、何本も蠅取紙が吊るされ、それなのに野菜くんたちの周りにはぶんぶんハエが



スイカ（多摩川近くの老人ホームの菜園にて 2000.7.23 採集）

飛んでいた。灰色の着物を着た背の高いおばあさんが、蠅取を持ってハエを追う。店の奥座敷には、ソテツのようなおじいさん。開けた障子戸越しに、ふぞろいな野菜くんたちを静かに見守りながら、湯飲みで酒を飲む。この八百屋の店主こそ、何を隠そう私の祖父。そうなのだ。昔はこんなふぞろいでデコボコしたものであふれていた。

野菜も道もデコボコ。大人も子どももデコボコ。金持ちも貧乏人もみんな一緒くたになって生きていた。雨が降れば道はぬかるみ、みんな泥んこ。日照りが続けば、土埃にゴホゴホ。夏には毎日、物凄い夕立。雷さまの迫力満点な太鼓の演奏に、おへそをかくして怯えたり、冬は冬で、からっ風。川は竜巻を起こし、屋根は飛ばされ、だからどこの家の屋根にも大きな石がたくさん載っていた。自然環境もかなりデコボコ。

木の葉も老木ともなると、葉っぱの周りのギザギザ加減も丸みを帯び、小振りになる。地球環境もそうなのか？ とはいえ、たかだか何十年かでこの自然環境の変貌振りは、とても不気味だ。

それでも一本の木を覗いてみれば、葉っぱはどの子もみんなデコボコ。元気いっぱい葉っ

ぱ。ちょっと疲れて半分枯れちゃっている子。虫に食われて穴だらけになっているもの。病気の葉っぱさん。いち早く色づき秋モードになっている子。共にある美しさ、やすらぎがここにある。これが自然なんだと、ホッとする。

こんな自然を体の中に持った人たちと出会った。

実は私はダンスもやっていて、何年か前から「共に歩むネットワーク」主催のイベントで踊らせてもらっていた。「障碍はひとつの個性！障碍を持った人も持たない人も共に生きられる世の中にしていきたい」との熱い思いで、青木優・道代ご夫妻が何十年にもわたり行っている活動のひとつなのだ。そこでまた、踊ることになった。でも、ここ数ヶ月私は全く踊れなくなっていた。何をやってもしっくりこない。心が踊らない、弾まないのだ。

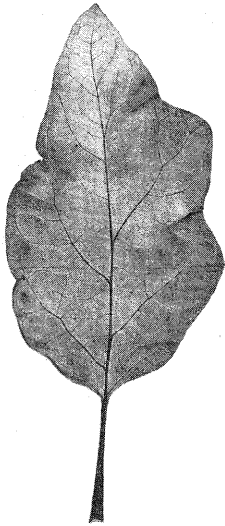
そんな時、たまたま友人に連れて行かれたライブ会場でその出会いがあった。ピアノとギターと和太鼓という奇妙な編成のバンド。この和太鼓におおっ！ときた。なんとまっすぐな音を打つ人なのだろう。この太鼓とどいたら踊れるかもしれない。継るような思いで声を掛けてみると、その人は生まれつき耳の聞こえない人だった。聾学校にも行ったけど、まだ小さいうちに普通の小学校に移りそれ以降、健聴者の中で生きてきたのだという。

「いろいろな方たちのおかげで、今の私はあります」

まだ二十三歳という若さで、こんなことはなかなか言えるものではない。本当にいろんな人たちに助けられてきたのだろう。一緒にいた彼の幼なじみの友たちも、体

の中にもっすぐな音をそれぞれ持っているようだった。このまっすぐな音は、一体何なんだろう？

イベント当日に分かった。聾や健聴の大勢の友人たち、家族総出で応援にかけつけ、人々との暖かくも太い絆で痛いほどだった。その光景は一本の見事な木。これが人の世の自然な在り方なんだ。私を感じたまっすぐな音。それは、たくさんの人たちの心の響きあう音。そんな豊かな音に手をとられるようにして、私は無心に踊っていた。……ふぞろいな野菜を見つめ



ナス（ルーマニア、ピシュテア村、エリザベータさんの庭にて
2000.8.5 採集）

ていた祖父の眼差しを懐かしく想い起こした。

私は祖父のリヤカーをどうしても押せなかった。薄汚れた作業着、地下足袋姿でポロポロのリヤカーを引いて市場に行く祖父。恥ずかしくていつも知らない人の振りをして追い抜いた。

休み時間、教室の窓から、重そうなりヤカーを引き店に帰る祖父の姿が見えた。夕方、八百屋に行くとい升瓶片手に、すでにはろ酔い加減。ガンバルおじいさんと、ガンバラナイおじいさん。両方の姿をありのままに見せてくれた。

もうじき死んでしまうと見舞いに行つたとき、私の顔をしげしげ見ながら「知らねえなあ」。これが私の聞いた祖父の最初で最後の言葉だった。

何にも話さなかったのに……祖父のふぞろいな野菜の精神性は、しっかり私の内に培われて

いた。「この世の中のひとつひとつのものは、全て同じ価値があり、光り輝く存在である。無駄なものなど何ひとつとしてないのだ」と私は、虫食いや朽ちた葉をありのまま丹念に描いているのだから。そして彼らの美しさに日々、驚かされている。(葉画家)

和太鼓・SEKINE MOTONARI

<http://homepages3.nifty.com/sweet-potato/>

『木の葉の美術館』<http://www.wood.jp/konoha/>

☆本文中の絵は筆者による

スイカ 紙／テンペラ SIZE:332mm×240mm

ナス 紙／テンペラ SIZE:225mm×158mm